

い地面を掘りさげることさえ、幸せを今・ここではない、どこか遠くに求めて旅行にあこがれ、乗り物につかの間の現実逃避の夢を託する。乗り物に対する子どものあこがれは、それが一見どれほど単

純であり、固執と見えようとも、もっと前向きで、必死なものを含んでいるように思う。

(愛育養護学校)

## 通園バスにて

河野 道子

今年もまた、新入園児を迎える季節がやって来た。入園式を終えてからしばらくの間は、緊張した面持ちの子ども達が、親に手を引かれて通園する。やがて子ども達の顔に緊張の色が消えた頃、通園バスが親の代わりを勤めるようになる。もちろん個人

差があつて、一斉に乗り始めるわけではないが、一学期が終わる頃には、希望したほとんどが、家から最も都合のよい路線の停留所で、乗り降りするようになるのである。

A子は、入園する前から、停留所で姉が通園バス

に乗り降りするのを見ていた。A子は早く大きくなっておねえちゃんのようにになりたいという気持ちから、通園バスにあこがれを抱くようになった。三歳で入園して、順調に園生活に慣れたA子は、念願の通園バスに乗れるようになった。通園バスには姉も乗っているし、バスから見る外の景色は珍しくて飽きないし、楽しく話をする仲間もできた。何の不安もなくバス通園する毎日だった。子ども達は、担任が自分のバスに乗ると、とても喜ぶ。A子も担任がバスに乗る日には、嬉しそうな顔を見せた。

ところが、A子はあるとき毎日のように、どうしても迎えにきて欲しいと母親にせがんだ。園で何かあったのかと心配したが、よく話を聞いてみると、友達を迎えに来てもらっているのを見て、うらやましくなったらしい、との母親からの報告があった。「今日はお母さんがお迎えに来てくれるんだよ」と言ったときのA子の輝くような顔は今でも忘れられない。担任がバスに乗ったときに見せた嬉しそうな

表情も及ばない笑顔だった。

考えてみれば、通園バスは、一般に、たくさんのお園児を集めた園と、通園させるのに都合がよいとする親の、言わば大人側の便宜によって運行しているものである。子どもにとって、母親なり父親なりに迎えに来てもらうに越したことはない。なぜなら、帰る道すがら、「今日は幼稚園でこんなことがあったんだよ」とか「あそこにあんなものがあるよ」などと話をしながら、本当に楽しい親子のひとときを過ごせるからである。幸いなことに、私の園では昨年からは、土曜日は通園バスが連休となり、子ども達が母親や週休二日の父親と嬉しそうに通園する姿を見る機会が増えた。送り迎えはたいへんなのに、と不満を述べる親もあるにはあったが、世の中心全体が忙しくせわしない昨今、土曜日のほんの一時を子どもと楽しく過ごす心のゆとりが親にも必要なのではないかと思う。

ところで、通園バスは大人の都合で運行している

ものであると述べたが、その中で子ども達はつまらないさみしい思いばかりしているのかというと、決してそうではない。子どもとは素晴らしいもので、大人から与えられた状況の中でも、楽しんで多くのことを学ぶことができるものなのである。

私の園では、行事のときには年長、年中、年少と一緒に遊ぶことがあるが、日常の保育の中では、縦のつながりができるような機会はほとんどない。兄弟の数が少なくなっている今、縦割りの保育は多くの教育的要素を含んでいるのではないかと思っているが、実は通園バスの中で子ども達は、この縦の関わりを経験するのである。

B子が途中入園してきたとき、周囲の子ども達は入園後約九か月を経ており、すっかり園生活にも慣れ、活発に活動していた。おとなしいB子は、圧倒され、一人ではなかなか行動を起こせずにいた。クラスの中では担任が援助することができたが、通園バスではどうかと、多少不安であった。ところが、

B子が利用することになった停留所の一歳年上の男児が、B子の面倒を細かく見てくれた。おかげでB子は、あまり困ることなく、バス通園できるようになったのである。

そのB子が年長になった。B子は一人っ子ということもあって、これまでに人に面倒を見てもらうことはあっても、小さい子の世話をしてあげる経験はほとんどなかった。だが、B子は、新しく入園してきた子ども達の面倒をよく見た。かばんがかけられないと、手伝ってあげ、転んで泣いていると、先生を呼びにきた。くつを履きかえるのを待っていて、一緒に手をつないで並んだ。ときには、泣いている子をなぐさめてあげたりもした。

私たちは、新入園児が入ってくると、年中、年長の子ども達に、「小さい人達に親切にしてあげてね。」と言う。けれども、自分がしてもらっていないことを、子ども達は、きつとできないに違いない。自分が小さかったときに、お兄さんお姉さんに

してもらったことを、今度は自分達がするのだ。そういう意味で、通園バスのなかで子ども達は、人に親切にするという行為を、身をもって体験することができるのだ。

毎日顔を合わせることに、同じ路線の子ども達は、年齢を問わず仲良くなる。これは母親同士も同じことで、特に停留所を同じくする親同士は非常に親密になる。これがまた、親子の精神状態の安定にプラスになっていると考えられる。

バスを運行している園のマイナス面として、地域的なつながりが薄いということがあげられる。実際、いろいろな地域から子ども達が通園しているため、仲の良い友達同士が互いの家に遊びに行くということが非常に難しく、幼稚園から帰ってからの家同士の付き合いまでにはなかなか発展しない。そのうえ、最近では近隣の付き合いが少ない集合住宅に住む家庭が増えているため、親子が孤立してしまいかねない。そんなとき、通園バスの停留所で、同じ

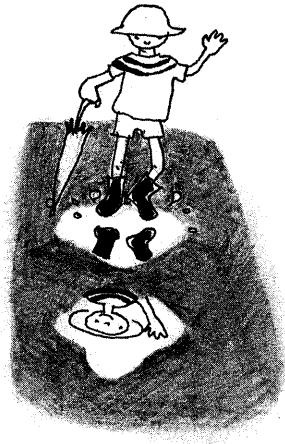
園に子どもを通わせる親同士が親密になり、互いの悩みを話し合える関係にまでなると、親の気持ちが大不安定ではなくなる。

実際にこんなことがあった。C子は、遠距離通園をしている子で、しかも電車通園であった。母親があまり社交的でないうえ、とりわけ地域的に周囲から離れていたため、まず親が親しく付き合える人、ができなかった。子どもも、親の影響があつてか、遊ぶには遊ぶのだが、親しい友達、なかなかできず、約一年間、親子共々どこか不安げな表情で過ごした。

年中になり、あるきっかけから、C子は電車を乗り越して、その駅から通園バスを利用することになった。その停留所はたくさんの子どもが利用しており、中には違う年齢ではあったが、同じような方法で通園している子どももいた。毎日顔を合わせることに、まず子ども同士が仲良くなり、それから母親同士が親しくなつて、互いの家を行き来する

までになった。不思議なことに、それからC子はクラスの中にも親しい友達ができ始めた。母子ともに表情が明るくなり、担任としても、今まで借り物のようで、どこかお客さんのようだったC子に、この園の子どもとしての存在感を感じられるようになった。家ぐるみで付き合う友達が幼稚園にいるのといないのでは、こうも違うものだろうかと思ったものだった。

通園バスには、このようにプラス面もある。しか



(洗足学園大学附属幼稚園)

しながら、子ども達にとっては、やはり「待つ」時間であることには変わらない。その時間を、ただ「待つ」時間ではなく、楽しい時間になるように援助するのが、バスに乗る保育者の務めであろう。私は、バスの中で子ども達といろいろな話をする。友達のこと、兄弟のこと、テレビのこと、おけいこのことなど、保育中には聞けない話がたくさん飛び出す。それがまた、私にとっては、子どもを理解するための一助となるのである。